

ワクチン接種 (=予防接種) の話 広報げろ 2018.8

ワクチン接種 (=予防接種) の話

麻疹(ましん) (はしか) や風疹(ふうしん)の感染、子宮頸(けい)がん予防接種の副作用問題などでワクチンの接種の必要性が話題となっています。

ワクチンは生命を脅かすような細菌やウイルス感染の予防接種に使われる薬剤です。感染症にかかると体の中で抗体などが作られ、新たに外から侵入する病原体を攻撃するしくみができます。このしくみを「免疫」といいます。人工的にその病気に対する免疫を作り出すのがワクチン接種です。

ワクチン接種によりまれに熱や発しんなどの副反応がみられますが、実際に感染症にかかるよりも症状が軽いことや、まわりの人にうつすことがないという利点があります。

ワクチンには、生きたウイルスや細菌の病原性を、症状が出ないように極力抑えて、免疫が作れるぎりぎりまで弱めた生ワクチン(ロタウイルス感染症、結核、麻疹、風疹、おたふくかぜ、水痘(みずぼうそう)、黄熱病 など)、ウイルスや細菌の病原性を完全になくして、免疫を作るのに必要な成分だけを製剤にした不活化ワクチン(B型肝炎・ヘモフィルスインフルエンザ菌b型ヒブ感染症・肺炎球菌感染症・百日せき・ポリオ・日本脳炎・インフルエンザ・A型肝炎・髄膜炎菌感染症、狂犬病、子宮頸がん予防 など)、細菌が作り出す毒素の毒性をなくし、毒素に対する免疫を作る働きだけにしたトキシイド(ジフテリア、破傷風(はしやうふう)など)の3種類があります。

麻疹は免疫が無ければ患者と同室に居れば必ず感染し発症すると言われる(接触、飛沫、空気感染)非常に感染力の強い感染症です。麻疹は大人になるほど、感染すると重症化する傾向があり、脳炎や肺炎で重篤な後遺症が残ったり、時には命を落とすこともある怖い感染症なのです。現在40歳以上の方はその予防注射が義務化されていませんでした(1966年より1978年までは自費での任意接種1978年より義務化)。しかし40歳以上の年代は麻疹の流行期、ほとんどの人が罹患しており、罹患して身に着けた抗体は、予防接種よりも定着しやすいので多くの人が抗体を持っています。

昨今麻疹の患者の発生が報告されていますが、患者の多くは特に27歳～40歳で、国際標準にあたる2度の予防接種を受ける機会がなかった世代に集中している様です。この時期は世界では標準のワクチンが日本では様々な理由で任意の有料接種になっていた時期です。現在では定期接種とされている風疹ワクチンでも、制度が改定される過程で予防接種を受けていない20代～40代の男性を中心に流行が拡大し、特に妊娠中の女性や胎児に影響を与えるとして、その危険性が大変危惧されています。このワクチン接種を受けられる人と受けられない人が発生してしまった状況を「ワクチンギャップ」と呼んでいます。この時期はワクチンの予防効果よりも有害事象が世論や社会問題として取り上げられ、ワクチンの必要性や重要性が認識されませんでした。今後、予防接種の有害事象に対する対策も取られてきていることを注視しながら、感染症による人命の喪失を防ぐためにワクチン接種を考えていくべきと考えます。

下呂市立金山病院顧問 古田智彦